



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



大使館で作品展示会、きもの体験会

千葉 麻里

4月26日(金)に毎年恒例の活け花、友禅作品展示会ときもの体験会を開催した。活け花、友禅は毎週水曜に、大使館内の学校で交互に教室が実施されており、大使館の皆さんが楽しみに通っておられる。その成果を夏休み前に披露する。その日には同時にきものを体験して頂くのだが、年々希望者の人数が増えている。

10時から持ち寄り送っておいだ振袖、男性や子どもきものを大使館学校の2階ホールに運び込み、床に衣装敷きを敷きつめ、待機しておられた希望者から順に次々に着せていく。今年はベテランの先生方4名(小泉、木挽、辻田、清水のいずれもきものコンサルタント、礼法きもの教室教師)をお願いして千葉の5名で着せていったが、40人以上の方が入れ替わり立ち代り来られ、2度目に違う色のきものも希望される方もおり、3時過ぎまで休む間がなかった。子ども達に人気の色のきものはなかなか脱がないので、待たされる子も出た。

活け花の山岸先生と助手の坂本さんは、11名の生徒さんと11時半を過ぎた頃から活けこみに入り、全員の作品をチェッ



クされて2時間ほどかけて完成、飾りつけが終わった。教室でも毎回、生徒さん全員の花を車で運ばれるのはたいへんなことだ。一人ひとり個性を活かしつ

つ手直し指導することも、友禅教室のときもそうだが非常に神経の要ることだろう。それでも、先生方もとても勉強になるとおっしゃる。友禅では、毎回、先生がデザインした下描きを用意されるが、次は季節のこんな花、新年の飾りが描きたい等々、様々な希望が出る。そして、展示会で並んだ作品も同じものがない、どれも力作揃いだった。

今年はお世話になった校長先生が交代されることになり、紋付袴を試された。常に夜遅くまで学校におられて気を配ってくださり大変お世話になった。祝日には校長先生お手製の美しい見事な切り紙が学校中貼られて華やかになり、私達もよく写真を撮らせてもらった。奥様もベテランの先生で素敵な方だ。帰国されるのは本当に残念なことだ。

忙しい中、展示会、茶話会などの準備に走り回ってくれたエレナさん、手作りのパイなど用意してくださった大使館の皆様、ミニコンサートの方々、写真をくださったオリガさん、そして、校長先生ご夫妻、本当にありがとうございました。またお会いできる日を楽しみにしています。(常任理事)

お知らせ

●第13回テーマ別ロシア語講座 祭り、祝日編

日時:6月9日(日)13:00~16:00

場所:田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」学習室D1

費用:会員3,000円、一般4,000円

講師:オクサーナ・ピスクノワ

●第61回マトリョーシカ絵付け教室

日時:2019年6月16日(日)13:00~16:00

講師:菅野エレナ

場所:田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室

会費:3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

●イワン・クパーラ、七夕祭り

日時:2019年7月7日(日)10:30~16:30

場所:猿島公園海岸(三笠栈橋から船で5分)

集合:三笠栈橋チケット売り場に10:10

費用:会員、スラブ人2000円、一般2500円、小学生1000円

(別途往復乗船券+入園料1500円、小学生850円)

●講演会『ロシアと私』 鳩山紀一郎氏

講師は日本人ならだれでも知っている有名な家族の一員で、直系4代全員が東京大学出身。ロシアにも招聘され、学術研究だけでなく民間ベースでも交流を深め、音楽にも堪能。

日時:6月15日(土)14:00~16:00(開場13:30)

会場:御茶ノ水YMCA会館217号室、JR御茶ノ水駅より4分

会費:会員/友好団体会員2500円 一般3000円 学生/ロシア

人1500円

申込:会費区分・氏名・連絡先明記の上、協会まで。

懇話会スタッフ募集:gene.masuda@s8.dion.ne.jp益田まで。

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel:03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

会員の皆様へ

来年3月の通常総会にて役員の変更が予定されており、本年9月に発足予定の次期役員候補推薦協議会にて総会で選任される役員推薦候補の協議が行なわれます。従来理事の皆様から推薦頂き新任候補の協議を行なっておりましたが、本年はこれと並行して会員の皆様より役員推薦候補者の公募を実施することとなりました。ロシアとの民間の友好交流に興味があり、当協会のボランティアの日口交流活動に積極的に企画参画する意思のある候補希望者を募集するものと年齢国籍は問いません。詳細は事務局までお問い合わせください。なお、応募者の推薦の是非は事務局による事前審査をへて上記協議会で決定されますので、公募が推薦を約するものではないことを予めご理解お願い致します。(事務局)

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先:郵便口座00160-9-66486、加入者:日口交流協会
連絡先:日口交流協会事務局E-Mail:nichiro@nichiro.org
*内堀學氏、遠藤洋子氏からご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

ガガーリンの原点 バイコヌール宇宙基地

藤本 信義

ロシアの町ではガガーリンとよく出会う。あるときは力強く両手を高く掲げ、あるときは親しげに、またある時には物思いにふけるようにその町その通り毎に様々な表情を見せる。27歳の青年が1961年の4月12日に宇宙に飛び立った、バイコヌール宇宙基地はカザフスタン共和国のチュタラムにある。国際宇宙ステーションに人と物資の両方を送り届けることができる唯一の宇宙港だ。

ソユーズロケットの1段目はたくさんの小型エンジンを束ねて推力を発生するクラスター型の設計が特徴だ。ガガーリンを打ち上げたボストークロケットのころからこの基本形態は変わっていない。日本のHⅡAロケットの一段目が大型のエンジン1基なのと対照的なデザインである。



Поехали!
発射台に向かうソユーズロケット

2011年の夏に打ち上げ準備リハーサルでバイコヌールを訪れていた時にちょうどこのロケットの打ち上げを見学することができた。モスグリーン色の機体は発射台に据え付けられてから燃料が注入される。マイナス190℃の液体酸素が注入されると、この部分は霜に覆われるので、打ち上げ直前のロケットが白銀に輝くそ

の姿が印象的だった。

バイコヌール宇宙基地で働く人は、宇宙基地に隣接するオアシスの様な町バイコヌールで暮らしているが、我々は宇宙基地の中の宿舎に泊まり込み、実験生物の飼育リハーサルを行っていた。日本の種子島や内之浦宇宙センター、あるいはアメリカのケネディ宇宙センターなど、海辺にあり水と緑に囲まれた発射場と違い、見渡す限り茶色で風が吹きすさぶ荒涼とした内陸に立地する宇宙センターでの生活は何から何まで興味深い。夜のうちにやってくるラクダの糞が道路のあちこちに山盛りとなっていたり、獐猛（に見える）野犬が平然と基地内を闊歩していたりする反面、食堂のおばちゃんはこのスタローバヤにもいる、ロシアのお母さんだったりする。

夜ともなれば前を歩く人の背中を星明りだけで見分けるほどの漆黒の闇に包まれるのも、バイコヌール宇宙基地ならではの。ガガーリンの有名なことば、“Небо очень и очень тёмное, а Земля голубоватая” そのものじゃないか！と妙に納得してしまった。

アメリカの有人宇宙船の開発が進んでいるので、日本人宇宙飛行士がバイコヌールから打ちあがる機会が残りに少なくなっているが、もう一度行きたい場所の一つである。

2019年5月

参考 国際宇宙ステーションと世界の旅。

<http://iss.jaxa.jp/column/station/vol01.html>

カザンとトルストイの青春

畔上 明

モスクワから東に向かって飛ぶこと1時間半、雄大なヴォルガ川を眺めながら下降してゆく先にタタールスタンの中心都市カザンがあります。

7～8世紀ヴォルガ川畔に住みついたトルコ系遊牧民ブルガールがタタール人のルーツとも言われており、13世紀にはモンゴル帝国の配下に置かれていましたが15世紀にカザン・ハン国が成立、そのタタール人のムスリム国も16世紀半ばイワン雷帝によって征服され、ロシアのヴォルガ川以東進出への突破口となったそうした歴史上の転換を目撃した地理上の要でもありました。

都市人口125万人の内ロシア人とタタール人が現在ほぼ同数居住し、市の中心部のカザン・クレムリン構内にはロシア正教の大聖堂とイスラムのモスクが並立する非常にユニークで興味深い文化に触れることが出来る場所といえます。

石油、化学プラント等による経済発展も著しく、2012年に日露投資フォーラム開催、日本からは枝野経済産業大臣率いる200名の代表団がカザンを訪問、2013年のユニバーシアード競技大会には600名以上の日本選手が参加、そして昨年度のサッカーワールドカップ会場として注目された「カザン・アリーナ」及び空港に隣接した「エクスポ・センター」に於いて今年8月には技能五輪が催されることもあって、その施設下見のアテンド役でこの春私はカザンを訪れる機会に恵まれました。

目を惹く彫刻や洒落た店に見とれつつ散策する楽しみに満ちたバウマン通り、まるでテーマパークの様な景観のタタール人旧居住地区、カザンカ川畔の遊歩道、そして何よりレー

ニンやレフ・トルストイが学んだカザン大学が市の中心部に広がっていることが魅力です。金沢大、埼玉大、筑波大、東京外大との交換留学も行われているとのことで、日本からやってきた学生からは住み易い町との評判も聞きます。

作家トルストイは、僅か2歳で母を亡くし、次いで8歳で父を、さらに13歳の時、後見人である叔母アレクサンドラを亡くしたこともあって、もう一人の叔母ベラゲーヤの世話となるため1841年カザンに兄妹と共に引っ越したのです。祖父がカザン県の知事を務めた時期ベラゲーヤ叔母さんがカザンの貴族ユーシコフに嫁いだという縁で少年トルストイの環境が大きく変わったのです。兄3人も学んだカザン大学に1844年16歳のトルストイは入学、東洋学部アラビア・トルコ(タタール)文学科で学び始めたものの、女子大の舞踏会や祖父や叔母の人脈による社交の場に顔出しし過ぎて学業に身が入らず落第。法学部に転部するも、多感で深く思索をめぐらせるトルストイには大学生活が合わず1947年には退学してしまう、そんな一筋縄ではいかない青春時代…。

若き日に顔に劣等感を持ち放埒な行動に走ったというトルストイの逸話を聞いた高校時代の私は屈折した青年の心に共鳴し、そんな彼の並ではない美しく純粋な視線、鋭い観察力、現実を実に生き生きと描写する力に対して強い関心を持ったのです。

カザンの街を歩くことは、トルストイの青春に思いを馳せると同時に、私自身の若き無様な日々を反芻する時間ともなったのです。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

《モスクワ・アラカルト53》

令和は日本の学生達と共に

日向寺 康雄

4月から中央大学で週1回「ロシア文化」をテーマに講義させて頂いている。これは、実家での父の介護ばかりでは「煮詰まってしまうだろう」とのY先生を初め周囲の皆様の深くありがたい配慮によるものだ。私は昭和62年12月からモスクワで働き始め、帰国を決めたのが平成29年7月なので、平成という時代を、ほぼ丸ごと30年外地で過ごし肌で感じてこなかった。そのためか戻ってからしばらく、故郷でありながら周りの空気が読めず妙な疎外感を味わい、ロシア文学に登場する永遠の「形象」、所謂「余計者」のような気分だった。それがいつのまにか令和である。学生達はもちろん皆、ソ連邦崩壊後の平成生まれだ。ほとんどの学生にとって「ソ連」や「冷戦」は歴史の教科書上のものであり「カチューシャ」でさえアニメの「ガルパン」を通じてかろうじて聞いたことがあるに過ぎない。果たして彼らとまともにコミュニケーションがとれるのだろうか…しかし、そうした懸念は杞憂に終わりそうだ。彼らは、何の先入観もなく素直に真っすぐ私の話に興味と好奇心を示してくれているように感じる。それには私を心配して、はるばる馳せ参じた「ロシアの息子（以前私のモスクワのアパートに居候し家族同然の間柄になった若いロシア人達を勝手にそう呼んでいる）」ニキータの存在が大きかった。彼は、黒パンやパスタ、それに最新の音楽・演劇情報及びモスクワの映像を沢山収めたUSBメモリーを持ってきてくれたのだ。授業中に私が話した内容など学生達は、数年もしたら



忘れてしまうだろうが、同年配のロシア人からもらった黒パンの味は生涯忘れないかもしれない。もしそうならば「ロシアを感じてもらいたい」という私の授業の主な目的の一部は確実に果たせた事になる。5月9日には、赤の広場での戦勝記念パレードのビデオを見せ（実況中継は仕事柄お手のものである）、学生達の意見を聞いた。中には毎年この日に軍事パレードが行われている事さえ知らない女子学生もいた。「聞いたことはあったが初めて見た。自分の眼で見ることで軍事大国としてのロシアの強大さを実感した」「とにかく本格的で圧倒された」「隊列が整い、とても格好良かった」「日本国内だとまず見られるようなものでないで大変新鮮だった」「中国や北朝鮮のそれと雰囲気が異なるように思う」「核兵器はパレードで見ると何となく怖いが、いつかパレードを生で見てみたい」「国防大臣が赤の広場に入場する際、十字を切ったように見えたが、そうした決まりがあるのか。政府と宗教との関係は？」「メディアは戦勝記念日をどのように取り上げているのか？」「ロシア人のアイデンティティを求めるものなのかな」等々…いかがですか？なかなか鋭く前向きで、好感が持てるものばかりでしょう。こうした学生達の前で講義できる私は実に幸せ者だ。大きな喜びと同時に自らの責任の重さをひしひしと感じている。

(元モスクワ放送チーフアナ・現大学非常勤講師)



サハリン残留日本人それぞれの「思い」

倉田 有佳

5月のゴールデン・ウィークを利用して静岡県伊東市に向かった。目的は、函館在住の淡中詔子（あきこ）さんの母キノさん（13歳で両親と渡樺）の親類が住んでいた地区を写真に収めてくることだった。

淡中詔子さんのことは、玄武岩・パイチャゼ・スヴェトラナ著『サハリン残留 日韓ロ 百年にわたる家族の物語』（2016）、NHKの番組「サハリン残留」で取り上げられたため詳しいことはそちらに譲るが、母に抱かれ、伊東に暮らす親類と会ったのは、1945年春、詔子さん1歳の祝いの時だ。間もなく敗戦になるとも知らず、内地勤務となった夫を九州に残し、キノさんは周囲の反対を押し切って娘と二人樺太に戻った。

ソ連軍の樺太侵攻、詔子さんの発病。母娘は帰国の機会を逸してしまった。終戦から約10年後、日本に帰るチャンスが巡ってくる。しかし、「妹弟（キノさんが戦後再婚した朝鮮人男性との間に誕生）とは離れたくない」、という詔子さんの一言で、母は帰国を断念した。

自身は帰国を果たせなかったが、「アキちゃん、あなたを必ず日本へ帰らせてあげるから」、と病床で言い続けた母の思いは、1992年の第6回帰国団の祖国訪問で叶えられた。しかし、戦後半世紀が経ち、双方を取り巻く環境は大きく変化していた。母方の親戚は、姪だけとの面会は望まなかった。

母方の墓に納めようと持参したキノさんの遺髪と爪を寺の香炉に入れると、詔子さんの傷心を慰めるかのように鳩が飛んできた。

筆者がサハリン残留日本人と出会ったの



は、1989年と90年の夏、旅行団のアテンド通訳としてサハリンを訪れた時だ。現地通訳は植民地時代に日本の教育を受けた世代の残留朝鮮人で、花や野菜を売るバザール（市場）で話しかけてくるのも朝鮮人のおばさん方だった。だが、いつ頃からか、我々の宿泊するホテルに日本人女性が数名で姿を現すようになった。ある時、「姉さん、手紙を頼まれてくれないかい」、と声をかけられた。こうした依頼はソ連時代にはよくあることだったが、開放間もないサハリンの出国検査は厳しく、今回ばかりは躊躇した。筆者の認識不足のせいでもあった。「サハリンに残留邦人はいない」、というのが当時の公式見解で、中国残留日本人孤児やサハリン残留朝鮮人問題とは異なり、戦後のサハリンで朝鮮人として生きてきた残留日本人に目は向けられていなかった。

永住帰国から20年。現在の詔子さんはロシアからの交流団の通訳を任されるほど日本語が堪能だ。夫と暮らす函館での生活にも満足している。今の「思い」は、母方の親戚に会って「家族に心配かけたことを詫びたい」、という母の遺言を伝えることだ。（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

モスクワ「ムゼイ」巡り・その16

ロシア連邦中央軍事博物館

Центральный музей Вооруженных сил Российской Федерации

大矢 温

前回ご紹介したクビンカの戦車博物館、軍事ヲタクのパラダイスではあるのだが、いかんせん、アクセスに難があった。というわけで今回はモスクワ市内にある中央軍事博物館。ロシア国防省直轄の博物館なので、戦車や装甲車だけでなく戦闘機や魚雷艇や潜水艦も見学することができる。アクセスも良い。地下鉄をドストエフスカヤ駅で下車して地上に出ると目の前にロシア陸軍中央アカデミー劇場の巨大な建物がそびえている。上空から見ると星形の建物なので間違うことはない。軍事博物館はこのアカデミー劇場の裏手にあたる。住宅地の中であるが博物館の前には巨大な大陸間弾道弾が屹立し、入り口横にはT-34戦車が置いてあるのでこれまたわかりやすい。



ジェが展示されている。すべて実物で、中にはジオラマになっているものあり、なかなか見ごたえがある。屋外展示場にも革命期から現代に至るソ連、ロシアの兵器類が提示されている。KV-1、KV-2といったレアものの第二次大戦時の戦車や MiG-29、SU-27と

いった比較的新しめの戦闘機、あるいはミサイル類と、ここもなかなか見ごたえがある。

売店では戦車や戦闘機の模型や軍事関係書籍、そしてここでしか手に入らないと思われるレアな軍事関係のお土産品が売られている。また、食堂には「前線の食事」というメニューもあるので、厳しい前線の生活に興味のある方は是非お試しを。

入場料 大人 250 ルーブリ

最寄駅は地下鉄ドストエフスカヤ

Достоевская

129110, г. Москва, ул. Советской Армии, д.2, стр.1 (札幌大学地域共創学群教授)



博物館の館内は、独特の雰囲気に包まれている。正面階段の上からは巨大なレーニンの頭部がこちらを睨みつけているし、壁一面愛国的な壁画で埋め尽くされている。なんといつでも第二次世界大戦では2000万人以上が犠牲になった国である。厳粛な気持ちで見学しなければならない。さて、展示自体は社会主義革命時から現代に至るまで、時代ごとに分けられた展示室に兵器や軍服など戦争に関する80万点以上のオブ

国際放送史研究の戯言No.003

アンジェリカ・バルーム

島田 顕

私がモスクワ放送局に赴任した最初の年明けのことだった。年末年始といっても特に何もすることがないまま、宿舎にいた。前任者のKさんがテレビを他の人に譲ってしまったために、私が入った宿舎の部屋にはテレビがなかった。それで、日本から持ってきた短波ラジオでラジオ・ジャパンを聞くか、文庫本を読みふけるしか時間のつぶし方がなかった。そんなときにH先輩に呼び出された。暇だったらご飯でも食べようということだった。ご飯を食べるといっても、外出するわけではない。同じ宿舎の建物のHさんの部屋で彼の手作りのご飯を食べるのである。それでも日本食が恋しくなっていた私は本当にうれしかった。まだお米が手に入らなかった時期だった。

食事をすませ、お茶とお菓子がでた頃に、あるビデオを見せていただいた。「ペースニャ」(歌)という名前の番組を録画したもので、日本の紅白歌合戦よろしくロシアの有名歌手が次々と出てきて歌を歌うのだった。日本の紅白歌合戦と異なるのは、日本のものが大晦日中にやるのに対し、ロシアの番組はカウントダウンが終わって、ロシア正教の教会の鐘が鳴り響いたあとに歌番組が始まることである。また日本の紅白歌合戦は全部生放送なのだが、ロシアのものでは、ミュージッククリップがいくつも流れる。ヨシブ・コブゾンや、「百万本のバラ」を歌ったアール・プガチョワなどの大物歌手からアイドルまで、まさに百花繚乱の宴であった。

そんな中で私が注目したのがアンジェリカ・バルームだった。「お人形さん」のような顔立ちと衣装で登場し、「不思議の国のアリス」のようなシチュエーションで歌うのである。これ一発で好きになってしまった。CDも買い、毎日聞くようになった。

ある日、町のチケット屋さんで、バルームのコンサートがあ

ることを知る。早速手に入れ、コンサート会場に赴いた。場所はレーニン図書館に近い軍人アパートの一角。軍人アパートというくらいなので、建物の壁面には名だたる政治家・軍人たちのレリーフがいくつも埋め込まれていた。私が知っている人物では、ソ連最初の元帥でスターリン粛清犠牲者のトハチェフスキーもそのアパートの一室に住んでいたことが記されていた。ポップスやアイドル歌手がコンサートをやるようなところではないように思えた。舞台の緞帳もレーニンが描かれていたように、このホールは元々は政治集会のためのものだったようだ。私が占拠したのは、二階席の一番前のよく見える席だった。

コンサートが始まると、日本ではおそらく見られない光景を目にすることになった。観客が舞台の上のバルームに花束を手渡し、ほっぺたにチューをするというものだった。花束をプレゼントすることはよくあるが、舞台下から花束を投げるか、舞台下から舞台上の演者に手渡しするというものだ。だがバルームのコンサートはそうではない。観客が舞台上に上がり、最後にキスするのだ。

あり得ない、と思った。と同時に、あることを考えた。これをやらない手はない。やりたい、と。コンサートは二夜連続だったが、一日しかいく予定はなかったのも、もう一枚チケットを手に入れる。二階席では舞台上に移動できないので、少々値が張るがアリーナ席のチケットを買った。アリーナ席はすでに売り切れていたが、運良く補助席が手に入った(通路上に張り出す席で少し安い)。もちろん花束も買って、準備万端で二日目のコンサートに赴いた。

頃合いをみて、ロシア人の女の子に続いて舞台上に上がり、花束を渡し、キスをした。目的を達したのだ。ほっぺたは柔らかかった。そしていい匂いがした。肌は汗と照明できらきら輝いていた。色っぽかった。ますますバルームが好きになった。

後日、このことをHさんに話したところ、驚いていた。番組でこのことを話すことになってしまった。ロシア滞初期の私のプチ自慢である。